



2007年漫画界 最大&最高の問題作!!
極貧エロ漫画家と天才美少女エロ漫画家
エロ漫画を通じて結ばれる究極の純愛物語

ゴージャス宝田先生 インタビュー

今回の「NO COMIC～」は第2回とらのあなコミック&ノベル大賞にてとらのあなスタッフ・編集者からアツい支持を集め総合特別賞を受賞した話題作「キャンノン先生トばしすぎ」のゴージャス宝田先生にインタビューして来ました。成年漫画にも関わらずジャンルを越えて支持される本作の制作秘話はもちろん、先生ご自身のお話までアツく語っていただいたこのインタビュー。いつもよりも大增ボリュームでお届けします!

第2回とらのあなコミック&ノベル大賞「GOLDEN TIGER AWARD」

総合特別賞(成年部門)「BRONZE TIGER」受賞作

「キャンノン先生トばしすぎ」 通常版(1200円+送料)
好評発売中!

※こちらの商品は成人限定商品です。18歳未満の方には不適切な内容の表現がございます。18歳未満の方ならびに高校生の方は本商品をご購入できないこと予めご注意ください。

■「キャンノン先生トばしすぎ」作品解説■

その極端な遅筆ゆえ、漫画以外のバイトで食い繋ぐのに精一杯なロリコン漫画家・ルンペン貧太。ある日彼は編集部で、憧れの大人気エロ漫画家・巨砲キャンノンと思わしき男性に会い、その作品に対する尊敬の念と欲情した思いを語りだす。しかし本当のキャンノン先生はその男性ではなく、彼の後ろにいた美少女だった。物語の当初は成年漫画らしく、エロ漫画家・キャンノン先生と、そのアシスタントとなった貧太、2人の「爛れた生活」の様子がメインとなりますが、物語が進むにつれ、貧太のエロ漫画に対するアツい思いが描かれます。「漫画家」ではなく、「エロ漫画家」になりたかったと貧太が押し出すように語るその思いは自分も含めたいわゆるオタクと呼ばれる全てのヒトの心に強く響きます。そしてもう一人、ただHなことに興味を持ってしまったためにいじめられ、傷ついた少女もまたその思いを叫びます。二人のアツい思い、その叫びの行方はどうなるのか。エロ漫画を通じて描かれる究極の純愛とも言えるこの作品、こんなカッコイイ作品、なかなかないですよ。

「キャンノン先生トばしすぎ」(以下、「キャントば」)がとらのあなコミック&ノベル大賞で総合特別賞に選ばれたのですが、その感想をお聞かせください。

涙が出るくらい嬉しいです。生きていて良かったなと思いますよ。どういう形であれ評価していただくのはすごく嬉しいですし、あと今迄のコミックスで一番売れたという意味ではたくさんの方に読んでもらえたわけですからそれが何より嬉しいです。

実際どの編集さんと打ち合わせしていても必ず話題に出してくれていたのが、「それだけ話題になっているのかな」と思っていましたけど、コミケとかでこれまで以上に熱烈な人が来るようになってびっくりしました。ただ買ってだけでなく、漫画の感想をアツく語ってくれたり、本当に嬉しかったです。あと変わったところでは以前からの読者の方から「これをきっかけに一般誌に行きませんか?」って結構聞かれましたね。実はとある一般誌の方からそのようなお誘いをいただいたんですけど、エロ漫画の仕事が充実している中でスケジュール的にも無理だったので断りました。「初めてエロ漫画を買いました」という手紙も嬉しかったですね。でもいろんな感想の中で嬉しい以上に照れくさかったのが「読んで泣きました」という感想です。汗が噴き出るようなものは描いたつもりだったんですけど、泣きましたというはさすがに恥ずかしかったです(笑)。

貧太くんがカッコイイという感想もいただいたんですけど、自分自身キャラクターがカッコよくなり過ぎないように気をつけたつもりなんです。ダメな人間やカッコワルイ人間が意地を見せる瞬間こそ自分はカッコイイと思っているんで、「キャントば」ではダメダメだった貧太が最後にほんのちょっと成長して意地を見せた瞬間にこそカッコよさを感じてくれたら嬉しいですね。

「漫画家」漫画が多くある一方で、他にない「エロ漫画家」漫画をテーマにしたのはどうしてですか?

元々エロ漫画家をテーマにしようとは思っていませんでした。まず自分の漫画に限界を感じていて、ロリ漫画で、しかも和装がメインだから派手な変態的なエロが出来なかったんです。だって相手は子供だし男は大人でしょ、大人が子供にいくら愛しているからって言ってもそんなに変態的なことは出来ないじゃないですか。だからどうしようかって思っている時に女性の側からイニシアチブを握って変態的なアプローチをする漫画だったら今迄と違ったエロシーンが描けるんじゃないかって思ったんです。

淫乱キャラってあまり好きじゃなかったんですけど、それなら始めから淫乱じゃなくて、何かきっかけで「スイッチ」が入る子にしようと思ったんです。例えばベッドに入った途端にスイッチが入ってエッチなことを嵐のようにしちゃう女の子ってどうだろうと。そう考え始めた時に浮かんだのが剣峰百合子っていうキャラクターなんです。でもスイッチが入るだけで淫乱になるんだとただの痴女になってしまうんで、エッチに前向きだったり、造詣が深いっていうこと理由付けとして官能小説家という設定を考えました。でも相手役の男を考えた時に官能小説家だと一人でも書けるし、担当編集者が相手なのはちょっと違うなと思ったんで、アシスタントと言う一緒に仕事する相手がいる漫画家なら良いんじゃないかと思って、そこでエロ漫画家・キャンノン先生が生まれたんです。だからこの漫画はエロ漫画家の物語じゃなくて、キャンノン先生である剣峰百合子っていう女の子の物語なんです。

貧太については過去にいじめられていた傷を負っている百合子をフォローするための、彼女の物語を完結させるための最高のパートナーとして考えました。彼をダメ漫画家にしたのは自分の漫画は基本的に物語の冒頭では女の子の方が精神的には大人で、男の方が年齢が上でも幼稚っていう位置付けで始めて最終的に男の方がちょっと成長して女の子に追いつく形で終わるっていうのを理想にしているんで、この「キャントば」でもそういった展開にしようと考えたからこそ、二人の才能や立場に差を付けたんです。だから結果的に貧太がエロ漫画家として成長する物語となったと思いますが、それをメインに描きたかったんじゃないって、百合子のパートナーとして、貧太を彼女の隣に並ばせるためにそうしただけなんです。

キャラクターの内面が深く描かれていることですがよく作品に惹き込まれたんですけど、一方で最後の方はエロ漫画であるにも関わらずそうした描写が少なかった印象ですが、そうした物語と性描写のバランスには気を遣ったんですか? 今迄の自分の漫画に比べると前半の5回くらいはエロを濃めにしました。コミックスで読んだ時に後半で少しストーリーに偏っても全体的に読めばバランスが取れて許してもらえんじゃないかって考えたんです。ストーリーに力を入れるために用意した自分に対する言い訳みたいなものですが、そうすることでそれまでエロメインの1話形式で描いていたのを最終回手前の3話については物語をメインとした続きものにしたんです。

でもエロシーンについて本当は意地でも削りたくなかったです。「エロを捨てて物語に走った」って言われるのが嫌だったんですよ。だから本当にエロ部分は削りたくなかったんですけど、それまでアンケートも比較的良かったことと、担当さんも任せてくれていたんで予定通り削りました。今でももうちょっと物語を圧縮してエロシーンを増やした方が良かったんじゃないかって思うんですけど、ただ一番エロシーンが少ない話でそれまで以上にアンケートが良かったんですよ。だからちょっと微妙な気持ちになりましたね。「俺に求められているのはエロじゃなくて物語なのかな」って(笑)。

最後のほうでの編集長のセリフとか業界裏話的な部分も評価されていますけど、そういった部分で気遣ったことはありますか?

担当さんから「あのセリフにはグッと来ました」と言ってもらえたんですけど、あそこでの編集長の言葉はどこの編集さんに実際に言われたわけじゃなくて、仕事をしている中で「多分こういうことを考えているんだろうな」って肌で感じたことなんです。でも劇中で貧太やキャンノン先生が喋っているからといってそのセリフを俺のセリフだと思って欲しくはないんですよ。もちろんキャラクターのセリフって自分の中から出てくるものだから、これまでの自分の経験によるところが大きいんですけど、決して自分の漫画業界や漫画家さんに対するメッセージなんかじゃなくて、こういう人間も業界にはいるよといったことを描いているだけであって、自分も「お前はダメな漫画家だ!」って言われていると思うんです。貧太が原稿が上がらなくて、半分もペンが入っていない時のシーンってまさに自分がそうだったんです。だからキャンノン先生がその時の貧太に言ったセリフって、「いやそうかもしれないけど、きついですよ、キャンノン先生」とか言いながら描いていました(笑)。

本当は漫画家の叫びとか辛さとか業界裏話みたいなものももっと描こうかと考えたんですけど、そうした部分を多くするとエロ部分も削れないといけなくてそれじゃ意味ないだろうって止めたんです。「キャントば」を業界漫画として評価して下さっている方もいるようなんですけど、実は業界のことはそんなには描いていないんですよ。

貧太が「エロ漫画家になるのが夢だった」というセリフと一緒にその思いを吐露するシーンはエロ漫画に携わる人間にとって貧太同様にすごい勇気を与えたと思うんですがご自身の経験も含まれているんですか?

「本当は 何よりも大切な事ですっ Hなことはっ」

（最終回 貧太のセリフより）



オタクであることだけで迫害されていたあの時代、自分がオタクであることを叫ぶ者の姿に貧太が感じたものとは？



業界漫画としての評価を決定付けたとも言える名場面の一つ、原稿を落とした貧太に突きつけられた非情な通告とは？



憧れのキャンノン先生との出会いに興奮する貧太だが、その正体はなんと現役女子●●生……!!



巨砲キャンノン (刺崎百合子)

エロ漫画界に突如現れた天才エロ漫画家。30万部を超えるヒットとなったデビュー作をはじめ、紙々とヒットを飛ばすその正体は女子●●生の現役女子●●生！ 貧乏家の娘で本物のお嬢様でもある彼女だが、その顔の中にはエロ妄想でいっぱいであり、その膨れ上がった妄想を執筆につづけている。



ルンペン貧太

デビュー5年の常駐漫画家。作品の仕上がりに拘るがゆえに極端な遅業であり、年に1作品も上げることが出来ないため漫画家だけでは生活することが出来ず、アルバイトをしながら執筆活動をしているが、偶然にもキャンノン先生と出会い、そのアシスタントとなる。



まさにクライマックス！ そのペン先が紡ぎ出す究極の連弾、2人の叫びがいま一つの形になって爆発する！



「何故ですか?!」インタビュウ中にも語られたキャンノン先生の叫び、その叫びに対して出した貧太の答えとは……?

ていたんですが、3ページ目のキャンノン先生のセリフの「何故ですか?!」のコマで手が止まっちゃったんです。頭の中で考えていた時はここでのキャンノン先生はすごく仰えた感じで問いかけていたんです。次に描く怒涛の執筆シーンに繋げるための、爆発前の一瞬の静けさみたいなものを出そう、その方が盛り上がるだろうと思ってはいたんですが、いざ描こうとするとどうしてもペンが進まなくて、ただでさえ時間がなくて焦っているのに「なんでこのたった1コマが描けないんだ」とって悩んじゃったんですよ。それでゴロンと横になってぐるぐる考えていたら、いやこは叫ぶんじゃないかって思ったんです。それで思いっきり叫ばせたとこ、めちゃくちゃしゅり来て、その叫びを貧太が受け止めたのが描けてからはもうズパーッと描けたんです。もしここを事前にネームで描いていたら、そのままネームをなぞるだけで納得いなくても描いたと思うんですよ。ある編集さんからはライブで即興演奏するジャズのような感じで言われたりしましたが、まあ即興でやることで外すこともあるかもしれませんが、逆にハマった時はそれだけ気持ちいいじゃないですか。自分も描きながらドキドキしたいんですよ。「おいおい、どうなるんだよ」と。

最後に読者へのメッセージをお願いします。

そういう質問が一番困るんですよ(笑)。「何を伝えたいんですか?」とかがって聞かれても、「ギャー!」としか答えられないんです。本当に「ギャー!」とか「ウオー!」といった叫びみたいなものしかなくて、その「ギャー!」といった叫びの中には「俺の漫画を読んでくれてありがとう!」とか、「これからもよろしくお願いします!」とかいろんなものが入っていると思うんです。だからメッセージをお願いしますと言われても言えないし、言えないから漫画を描いているんです。自分にとって世の中との接点って本当に漫画しかないんですが、この「キャンノン」は今迄のコミックスで一番売れたし、こうして賞をいただいたということはみんなが読んでくれたってことの証明だと思うんです。だからこの作品を通じて誰かと繋がったかなという感覚があるんで、それは本当に嬉しいです。漫画家って新作を発表しないと死んだことにされちゃうじゃないですか。だから自分が漫画を描いて、その漫画をみなさんが読んでくださっていることがわかると自分が生きている実感がするんですよ。私生活で幸せを感じることもなんか無いんですけど、もし漫画を通じて何かみなさんの心に届いたなら自分にとってそれは幸せな瞬間だと思うんです。だからこれからも叫び続けたいですね。

あの場面で貧太が爆発的に成長するんです。5分10分前くらいまではダメ人間だったけど、あの瞬間に彼はほんのちよびりだけ大人になるんですが、瞬間的に成長するためにはなにが起爆剤がなくちゃいけないと思って、その起爆剤はエロ漫画に対する思いが強くなくちゃいけないから、じゃあ彼がエロ漫画に対して強い思いを持つようになったのはどうしてだろうと考えたら、もうあれしか浮かばなかったんです。

「なんて勇気のある人だろう」は自分も本当に思ったことでした。さすがにあんな感じじゃなかったんですけど、それまでのエロ漫画のイメージって当時は劇画っぽいものしかなかったと思うんですが、それが途中から同人原稿とかガンガン入れたコミックスが出版されて、中身を読むと同人原稿だからもう好き勝手描いていて、それに驚いたんです。「キャンノン」でも描いていますが、本当にページの端このように適当にメモが書いてあったり、部屋に貼ってあるポスターにその当時流行ったアニメのキャラクターがすごくきっちり描いてあったり、商業誌なのにやっていることが学園祭のノリで、それでお金を稼いでいる人がいるということに感動したんです。

漫画家になろうと思ったのはそういった感動体験からですか?

いやその時は漫画家になろうなんて思わなかったです。自分は卒業してすぐに就職したんですが、29歳の時にリストラされたんです。働いている時も友達に誘われて同人誌にちよろちよろと漫画は描いていたんですけど、もうすぐ30歳になるのに失業して、どうしようと思った時にここでの選択が自分の人生を左右すると思って真剣に考えたんです。再就職して漫画もすっぱりやめて普通人として生活を送るのか、それとも漫画を描き続けるのか。もし漫画を描き続けるのなら、バイトをしながらとか半端なことはやめて貧乏して路頭に迷ってもいいからとにかく働かないで漫画だけを描いていくのかどちらかを選ぼうと考えて、出した結論が漫画しかない、漫画で稼げるようになるうだったんです。

ただでそれまで年間でせいぜい40ページくらいしか描いていない自分がいきなりプロにはなれるはずもないですし、でも生活をしないといけなからまずお金を稼ぐ手段として考えたのが同人誌だったんです。

同人誌なら自分の好きなように描いて、それを印刷所に持って行き、同人誌ショップに売ってもらえればイベントが

なくてもまとまったお金を得ることが出来ると思ったんです。それで知り合いに「これから同人作家として生活していこうと思うんです」と話したんですが、そうしたら「いや、オリジナルロリ漫画じゃ厳しいよ」と言われたんです。全部じゃないですけど、人気のあるジャンルってパロディが中心でしかも「オッパイ系」が多いことから、自分のようなオリジナルロリは厳しいだろうって言われて、すごく焦りました。それでどうしようと思って次に考えたのがじゃあたくさん描けばいいんじゃないかってことだったんです。

それからひたすら描き続けていましたね。最初の2年間くらい平均睡眠時間は3時間くらいだったんじゃないかな。目が覚めてからぶっ倒れるまで描いて、ぶっ倒れて服を着たまま床で寝るんです。でも寝苦しくてすぐ起きるんです。それでまたぶっ倒れるまで描く。それまで年間40ページだったのが10倍の400ページくらいになったのかな。もう仕事をしていなかったから、時間だけはあったんです。貧乏でお金がなくて、でも描かないとお金が入ってこないから、今ここで頑張らなかつたら俺の人生は終わりだって思いながら描いていました。そうして出来上がった原稿を印刷所に持って行って出来た同人誌をとらさん(とらのあな)に販売してもらってお金を稼ぐ生活をずっと続けていました。その頃は体力が残っていなかったから即売会にもほとんど出ていませんでしたが、そうした生活を続けている中でフォックス出版の編集の方から電話をいただいたんです。「オリジナルロリでたくさん同人誌を出していますけど、1冊にまとめませんか?」って。それでデビューすることになったんです。

印象的だったのがキャラクターの動きと云うか、漫画を描くシーンで必殺技を出すような感じでポーズというか、見得を切るじゃないですか、エロ漫画にはない開の取り方になって思ったんですけど、そこは意識されたんですか?

最終回の下描きを担当さんに見せた時、やっぱりこのポーズに驚いてくれたんですよ。「おお! この手はすごいですね」って。まあエロ漫画にこういうシーンが必要かといったら要らないと思うんですけどこの時はこれしかないなと思ったし、担当さんもOKしてくれたんで、これで良かったんじゃないかな。

自分はネームを描かないでいきなり下描きから始めるやり方で漫画を描いているんですが、ここはそのやり方が良かったと思うんです。最終回を描いている時、頭で考えていたことをいつものように画面にどう描くか考えながら描い